

## 在日バングラデシュ人に対するインタビュー調査研究 —来日した時の「夢」と日本で直面する「現実」—

### Interview Research on Bangladeshi Nationals in Japan: An Investigation on Gap between “Dream” and “Reality”

モハメッド・アンサルル・アラム\*  
Mohammed Ansarul Alam

#### Abstract

Objective of the research is to investigate the goals and dreams of Bangladeshi nationals to come to Japan. To investigate of their self-evaluation on their achievements and challenges in Japan is another major objective of this research.

An interview survey was carried out on 11 Bangladeshi nationals who have been living in Japan for more than 10 to 20 years. Most of the respondents have long life experience in Japan and engaged in various social activities among the Bangladeshi nationals in Japan. In the interview how the Japan life make an impact on their lifestyle and future plan has been thoroughly investigated. All interviews were recorded in an IC recorder and analyzed by using content analysis.

It has been revealed that main objective of coming to Japan is to have a financially secured life. Data shows that in most of the cases, respondents are satisfied with their job and income, as well as their support to the family and relatives who live in Bangladesh. On the other hand, it has also been found that they feel insecurity regarding their future life, particularly about the future of their children and some other religious matters. The findings of this research will provide a guideline for not only those who have been living in Japan but also to the young Japanese language learners who are planning to go to Japan as well as the foreign language education policy makers of Bangladesh.

〔キーワード〕 在日バングラデシュ人、来日時の夢、日本で直面する問題、日本滞在、在日イスラム教徒

#### I. はじめに

日本は経済大国であり、大勢のバングラデシュ人の若者にとって「夢の国」でもある。バングラデシュは独立直後から日本との友好が外交関係を継続していて、大勢のバングラデシュ人の若者が留学や就職目的で来日している（アラム 2015a, 2015b）。また、日本への留学や就職を目指して、日本で日本語を学んでいる学習者も多い（国際交流基金海外機関調査 2021 など）。その中

---

\* ダッカ大学現代言語研究所教授 Professor, Institute of Modern Languages, University of Dhaka

で家族を呼び寄せ、長期滞在の人も少なくない。

だが、文化、宗教、食品など様々な観点から両国に差があり、長い時間が経つと不満を感じることもある。また、自国で豊かな生活をしていても、日本で物価や収入などで苦しんでいる人も多い。したがって、夢の国である日本に来てから勉強、収入、生活などを含む彼らの人生がどの方向にどう変わったかを調べる必要がある。

## II. 研究背景

バングラデシュと日本の外交関係は50年を超えている。独立直後から様々な面で両国の間に信頼関係が構築されている。一般人の立場から見ると、対日イメージはとても良く、日本の品物の質、日本人の親切さ、収入がバングラデシュよりはるかに高いという印象が強い。そのため、独立してから、特にバブル経済のときに、大勢のバングラデシュ人が様々な目的で来日している。90年代までバングラデシュ人は「到着ビザ」で日本に入国できていた。日本はアジアの大国として現れ、出稼ぎ文化のバングラデシュ人の多くは日本をターゲットしていた。短期滞在中に入国した人も日本語学校に入ったり、就職できたりすることで、長期的に残っていた。バブル崩壊後、入国などが難しくなってしまったが、長期滞在を目指して来日する人、特に若い男性が多かった。彼らの中で具体的な目標を持って行った人もいれば、ほとんど何も知らずに誰かに勧められて行ってしまった人もいる。

21世紀に入ってから、バングラデシュからどの資格で日本へ行こうとしてもほとんどの場合は日本語能力が要求されている。また、日本社会との関わり合い、職場環境などを考えると言葉だけではなく、文化、価値観、マナーなどの知識も欠かせないものである（アラム2016、2019など）。ここ数年IT技術者や技能実習生を含む様々な資格で日本に入国しているバングラデシュ人の数が増加しつつある。日本外務省のデータによると、2022年6月現在、在日当該国人数は20,954人である。このような動きを考慮した上で2017年にはダッカ大学で史上初めて「日本語文化」の4年間学士課程ができた。その後、2021年に同学科で「日本語文化」の修士課程もできている。だが、来日している全員が大学あるいは他の教育機関で日本語・日本文化を学んできていると言い切れない。

アラム（2015b）は在日バングラデシュ人の日本語使用実態と人間関係構築について調べた。大きな夢を持って日本に来て、苦勞しているバングラデシュ人は少なくなかった。アラム（2015b）は日本語使用や日本語教育政策などに焦点を当てて、長期滞在のバングラデシュ人の人生などについてほとんど触れなかった。また、バングラデシュは人口密度が世界で最も多い国の一つであり、出稼ぎ大国だと言われている。中東アジアをはじめ様々な国にバングラデシュ人は就職を目指し行っている。そして、大勢の若者が先進国に留学に行っている。バングラデシュ政府は、2001年に『海外在住福祉就職省（Ministry of Expatriates' Welfare and Overseas Employment）』を設立し、海外に出る人々を対象に様々な研修を実施している。また、『2010年国家教育政策』では、海外に暮らしているバングラデシュ人の言語生活や社会生活に関する調査の重要性を謳っている<sup>1</sup>（アラム2015b）。

<sup>1</sup> A survey will be conducted about the needs of the countries that import manpower from Bangladesh. Course materials in vocational and technical education will be included accordingly. Provision will be there to train the students to have some primary skills of the languages of those countries. [National Education Policy 2010, p26]

上記の記述からも分かるように、大勢のバングラデシュ人が就職や留学、すなわち良い生活や将来を夢見て、海外に渡航している。経済的にアジアの大国である日本も例外ではなく、そこで暮らしているバングラデシュ人も近年増えつつある。このような状況で、彼らを対象に研究することはバングラデシュと日本の両国のみならず、人文社会科学のためにも意義があると言える。

### Ⅲ. 先行研究

バングラデシュ人の来日時の夢と直面する現実を把握するために、在日バングラデシュ人、在日外国人の生活、バングラデシュ人が高等教育や出稼ぎに海外に出ることなどに関する文献を調べた。

まず、バングラデシュ人が来日する目的に関する資料を概観した。Alam (2020) ではバングラデシュ人の日本語学習目的が様々な方向に向かっていて、日本語教育も言語内容のみならず日本での生活に焦点を当てて考えるべきことが指摘されている。長年の傾向を見ると、大半の学習者が「日本留学」と「仕事」を目指して日本語を勉強していることが分かる(松本2000、アラム2005など)。だが、近年は「仕事」を目指す人々の中でも目的が明確になっている。例として、IT技術者、特定技能実習生、高度人材などのカテゴリーで来日していることが分かる。また大勢の人が家族滞在で来ているが、彼らの目的は単に家族と一緒に暮らすことか、他にも何かあるか、不明である。また、20～30年以上日本に住んでいる人がずっと前どのような目的で来日したか、そのような調査も見当たらない。

日本滞在のバングラデシュ人がどのような場面でのように日本語を使用しているかについてはアラム(2015a)の調査がある。アラム(2015a)は、在日バングラデシュ人111人を対象に、アンケート調査によって日常生活で使用する日本語の頻度を調べた。その結果、在日バングラデシュ人は日常生活で日本語をあまり使用していないことが分かった。また、因子分析を行い、5つの因子を抽出した。それらは「求職活動」「医療関連の行動」「交通情報の確認」「地域コミュニティとの関わり合い」「メディアからの情報収集」である。この研究の結果から在日バングラデシュ人は、日常生活に密接な関係を持つ場面と、社会との関わりに関する場面で日本語が使用されていることが分かった。アラム(2015a)は、バングラデシュ人の日本語使用頻度を明らかにしているが、それが彼らの来日する目的を叶えるようにどれだけ影響しているかなどについては焦点を当てていない。

また、アラム(2016)は、日常生活でバングラデシュ人がどのような問題に直面しているか、それはどう乗り越えているかを一人のバングラデシュ人学生に半構造化インタビューで調べた。この研究で明らかになったのは海外生活で言語能力はもちろん大事であるが、相互理解や意見調整のための能力としても重要である。この調査は一人だけの学生を対象に行ったもので、その結果を一般化することはできないだろう。

外国人の生活や職場での人間関係について様々な研究がある。そのうち茂戸藤(2012)は日本で働いている中国、韓国、タイ、インドネシア、インド、この5カ国の21名に職場で感じるギャップや抵抗について調査を行った。調査結果は、「仕事の進め方」、「仕事の価値観」、「職場の上下関係や人間関係」などについてギャップや抵抗を感じていることが分かった。すなわち、国籍を問わずに、海外での生活や職場で様々な面でコンフリクトに直面することはよくあることである。

在日バングラデシュ人に関する研究は非常に少ない上、そのほとんどは留学生や仕事で来日し

たばかりの人を対象としている。日本滞在期間がまだ浅い人々を対象にしたこれらの研究結果からはバングラデシュ人の来日する目的がどれだけ実現できているか、把握しにくい。以上を踏まえて、長年日本滞在中バングラデシュ人がどれだけ満足しているか、何が課題としてぶつかっているか、調べる意義があるだろう。

#### IV. 研究目的と課題

以上のような観点から、本稿では、来日したバングラデシュ人が持っている夢がどれだけ叶ったか、またこれからの人生も考慮した上で、来日したことは彼らの人生に全体的にどのような影響を与えたか、を明らかにすることを目的とする。

これを探るために、具体的には、次の3つの研究課題を設定する。

課題1：在日バングラデシュ人の来日した動機や過程は何か。

課題2：来日したことによって、その夢はどれだけ叶ったか。

課題3：これからの人生を考えて、心配なことは何か。

#### V. 研究方法

筆者は2022年7月末から8月末までの33日間、成蹊大学アジア太平洋研究センターに招聘研究員として在籍する機会を得た。本研究に使用するデータのほとんどは筆者が滞在中に収集したものである。

##### 1. 調査対象者

調査対象者は長期的に日本に滞在しているバングラデシュ人11名である。データはスノーボール・サンプリングで収集した。まず、日本でバングラデシュ料理店を営んでいるコミュニティ代表の方に依頼し、27名のバングラデシュ人の名前と連絡先を教えてもらった。全員に電話し調査目的を説明し、都合のよい日時を確認した。筆者の日本滞在期間も限られていたため、両方の都合が合った11名にインタビュー調査を行った。調査協力者の年齢は20代から60代まであるが、そのほとんどは日本での滞在期間が10年から20年以上である。調査協力者の基本情報を表1にまとめる。ここで協力者をR-01～R-11コードで名づける。

表1：インタビュー調査協力者一覧（2022年08月13日～28日実施）

番号	性別	年齢	所属・住所	調査日・場所
R-01	男	60	農家、海老名市、神奈川	13日、自宅
R-02	女	48	主婦（ECC教師）、神奈川	13日、自宅
R-03	男	62	一般社員（記者）、東京	15日、池袋喫茶店
R-04	男	35	一般社員	16日、秋葉原レストラン
R-05	男	43	一般社員食品系、東京	16日、池袋喫茶店

R-06	男	27	エンジニア、神奈川	17日、秦野レストラン
R-07	男	48	アマゾン、東京	18日、目黒レストラン
R-08	男	57	一般社員（記者）、東京	23日、赤羽駅北口
R-09	男	36	一般社員、東京	24日、大塚レストラン
R-10	男	38	一般社員	25日、秋葉原
R-11	男	44	一般社員、神奈川	28日、秦野

上記の11名に調査を行い、残り16名をスタンドバイにしたが、時間の制限で本稿の研究課題は上記の11名のデータから探ることとした。

## 2. 調査方法

1で記述した11名に表1に記載されている日に半構造化インタビューを行った。主な質問項目は「日本に来たきっかけは何でしょうか」、「日本に来た時の目標はどれぐらい実現できたのでしょうか。できたこと、できなかったことの原因は何だと考えられますか」、「あなたが経済的にサポートをしている家族・親戚は、あなたの来日時点と現在で、生活のレベルに差が見られますか」、「将来の長期的な計画は何でしょうか」などである。筆者は協力者の都合や希望の場所で全ての協力者の母語であるベンガル語でインタビューを行った。インタビューはICレコーダーで録音し、筆者が日本語に翻訳した。その後、翻訳した内容は、日本語とベンガル語を理解する第三者にダブルチェックを依頼し、その妥当性を確認した。

## 3. 分析方法

本稿で収集したデータの分析に内容分析を選定した。近年、内容分析はインタビュー調査で得たデータ分析によく使用されている。その理由として、インタビューでの発言は誰が、どんな状態で述べているかがデータから見えてくるからであると考えられる。バングラデシュ人が語る発言の中でバングラデシュ、日本、自国にいる家族、日本の社会・職場という様々な場面や話題が混ざって出てくるのが予想されていた。そのような内容の質的なデータには内容分析が一番相応しいと考え、この方法を採用した。

# VI. 結果と考察

本章では、収集したデータを分析・考察することで分かったことを述べる。考察では協力者の発言のみならず、彼らの学歴、年齢、宗教、社会的な背景なども考慮する。次節で、データ分析を行い、上掲の3つの研究課題への回答を探る。

## 1. 来日した動機や過程（研究課題1）

研究課題1ではバングラデシュ人の来日する動機や過程を探ってみた。本稿の「研究背景」にも記述したように、近年留学や仕事で来日するバングラデシュ人が増加している。実は、バングラデシュの独立直後からバングラデシュ人は日本への興味を持ち、多くの若者は夢の国として日本に憧れている。どのルートでも来日を目指すバングラデシュ人のほとんどは自国で初級レベル

の日本語を勉強している。すなわち、日本語学習者の動機が来日を目指す点にバングラデシュ人の動機の特徴があると言えよう。国際交流基金の「2021年度日本語教育機関調査」によると、全世界の学習目的の上位2つは「日本語そのものへの興味」60.1%と「アニメ・マンガ・JPOP・ファッション等への関心」59.9%である。それに対して、バングラデシュ人の日本語学習目的の上位は「国内での現在の仕事・将来の就職」と「日本での将来の就職」であり、両方とも87.9%で、50%上回る数字の目的はそれ以外なかった。ということは、仕事为目的で日本語を学び、来日目的の大半も経済的な理由であることが分かる。

本調査で長年日本に滞在しているバングラデシュ人に来日したきっかけを聞いてみた。「日本語学校へ留学」「大学・専門学校へ留学」「仕事」という回答があったが、日本語学校や大学・専門学校への留学の目的も将来日本で就職することであった。すなわち、最終目的は日本に残って仕事することであった。協力者「R-09」は20代で日本に来ている。彼は自分が日本に来たきっかけについて次のように語っている。

私は就労ビザで日本に来ています。日本に来た理由はいい給料です。他の国より日本での収入がはるかに高いと聞いていました。

上記の発言からも分かるように、バングラデシュには出稼ぎ文化があり (Alam 2022)、どの国に行くかが収入で決まる。ただし、中東アジアの国々へ労働者として行くことと、日本に日本語学校への留学生として行く条件は大幅異なる。その最低の条件が満たさないと日本に行くことは難しい。言い換えると、ある程度の学歴も日本に行くことの最低基準になっている。それで、高等教育で来日し、そのまま就職などに就くケースも少なくない。それはもう一人の協力者「R-07」の次の発言からも理解できる。

私は文部科学省の奨学金で学士課程に来ました。卒業してから就職しました。日本で学歴があれば、いい就職やいい給料ができます。

「R-07」の第一の動機は先進国で高等教育を受けることだと言える。また、私費留学生として日本へ行ける経済的な能力を持っている学生やその家族は限られている。だから、奨学金が得られるとその国が優先順位の2・3位であっても、その国へ行く傾向が見られる。留学生の中でも私費で「日本語・専門学校」や「大学・大学院」に行く人と、奨学金で「大学・大学院」に行く人、2パターンがある。後者は「エリート留学生」とも言われている。自国でも教育背景が高いレベルの学習者はエリート留学生として、すなわち、奨学金で留学することを目指している。ただし、いまだ日本に留学に行っているバングラデシュ人学習者の大半は私費留学生である。

ブローカーの手数料も考えると日本語学校に1年間のコースに行っても、国を出る前に100万タカ（約130万円）以上の出費が必要となる。これはバングラデシュの一般的なサラリーマンの年収の数年分に相当する。来日する過程も「R-06」が語っているように主に2パターンある。

先に日本に行った田舎の遠い親戚に誘われました。100万タカ以上かかりました。自分で直接連絡できたらこれの半分で来られたのに…。

「R-06」と違って、親戚の誰かがすべての手続きをしてくれるケースも少なくない。そして、「R-02」のような家族滞在で来日した人のきっかけは違うものである。

夫は日本でずっと仕事することを決めていたので、私にも別の選択肢はありませんでした。他には何の目的はありませんでしたが、日本に来てからいろいろな活動に関わりました。

家族滞在の人、特に妻たちの来日目的や過程はほとんど統一している。夫によって呼び寄せられて、すべてのプロセスも夫が先頭に立ってやってくれるのが普通である。これはバングラデシュの文化にも関わるのだが、機会があれば海外の夫のもとへ妻を呼び寄せることは家庭や社会にも高く評価される。

上記を踏まえて、多くのバングラデシュ人の来日目的は経済的に安定した生活をするということが明らかになった。つい最近までは日本留学が第一希望であったが、それも最終目的は仕事であった。また、来日する過程はブローカーを通して行くケースが多いが、家族や親戚のサポートや紹介で行く人もいる。このようなチャレンジを持って来日するバングラデシュ人が日本滞在をどう評価しているかを次節で記述する。

## 2. 夢の実現（研究課題2）

本節では、バングラデシュ人が来日したことによってその夢がどれだけ叶ったかを探る。人間はどんな小さなことにしても何らかの目的でやるものである。家族、母国を離れて、海外に行くことに大きな目的があるのは当然であろう。その目的も単なる金稼ぎか、自分のキャリアや人生、そして家族、全体の将来の道を構築することか、人によって違うだろう。

本研究で来日時の目的をどれだけ叶えたか、を聞いてみた。調査協力者が日本に来てよかったことは何か、自分や母国にいる家族にどのようなサポートができたか、それによって生活の水準がどう変わったかなどを伺った。

日本滞在が長ければ長いほど成功する例が多い。滞在期間が長くなると直面する問題にも慣れてきて、生活がしやすくなることも考えるだろう。逆に、最初から物事がスムーズにいつているからこそ長く滞在していることも考えられる。今回の調査協力の中で日本に最も長い滞在している一人「R-01」は今の生活について次のように語った。

神様のおかげで、娘が3人で長女は日本の大学で博士課程在学中です。次女も大学生です。

バングラデシュの社会的な背景から考えると大半の家庭は子供の中で男が一人でもいてほしい。近年は変わっているが、男の子がいない家庭はまだまだ不安を持つ。その理由は、社会の制度・習慣により男子が親や世帯を一生守るためと言われる。「R-01」の場合は子供3人とも女子にもかかわらず、彼女らのことを誇り語っている。語りの最初の「神様のおかげで」という語句にも焦点を当てたい。バングラデシュ人あるいはイスラム教徒がこのような語句を用いること、すなわち、神様に感謝を当てることは今の状態で満足している意味を表す。同協力者は母国にいる家族も定期的にサポートして来ている。それに関して次のように語っている。

来日してから国にいる兄弟や親戚に経済的にサポートをしています。また、弟と義理の兄を日本に連れてきました。彼もいい生活をしています。

基本的にほとんどのバングラデシュ人がいい生活を夢見て来日している。収入の良い職に就くこと、そして、日本あるいは母国にいる家族を経済的にサポートすることも最も大きな目標の一つである。「R-01」は自分の弟だけでなく、義理の兄にも日本への入国をサポートしていることは、広い範囲で家族が幸せになることにつながる。似たような発言は「R-04」のテータからも抽出できる。

国にいる家族や親戚はそんなに困っていないのに、いつもこれ欲しい、あれ欲しいと言うんです。そのサポートはしています。彼らはハッピーです。また、国にいる両親の生活費はもちろん、親戚の結婚式や何かイベントがあったら、できるだけお金を送っています。みんな期待しているからです。

気持ちとして家族（既婚の人は兄弟を含む）で経済的に安定した生活ができることを目指している。それが来日することによってどれだけ実現できたか、それで調査協力者が成功度を図っている。そして、成功例すなわち、来日時の夢が実現できたかについて直接述べている「R-09」もいた。

先進国に來られて、収入もバングラデシュよりはるかにいいので、来日目的はある程度達成できたと言えます。……バングラデシュでもマイホームも建てました。これは5階まで増築する予定です。

バングラデシュ国内でマイホームを建てるのは一定を超えた収入ではないと非常に難しい。それが日本では普通の仕事をしながら貯金したお金でできてしまう。これは実現した夢の最も具体的な例の一つである。更に、日本とバングラデシュを比較し、日本で得た成功をこれからも継続的に続けるように、ずっと日本に残りたいという「R-04」のような意志も見られた。

バングラデシュに戻りたくないです。帰国は最後の選択です。できれば永遠に日本に残りたいです。日本でキャリアが成功しない場合、他の先進国を目指します。自分の子供をバングラデシュで生活させたくないです。

日本でもうまくいかない場合は、必要な他の先進国へ行ってしまう、母国であるバングラデシュには帰りたくないという強い発言があった。ここには日本でのいい生活だけではなく、バングラデシュの生活についての不安・不満が見られた。

上記を踏まえて、長年日本に住んでいるバングラデシュ人の来日時の夢は大半が叶えられていると言えるだろう。次節では、これからのことも踏まえてどれだけ満足しているか、あるいは心配していることについて述べる。

### 3. これからの人生（研究課題3）

本研究の最後の課題としてこれからの人生を考えて、心配なことは何かを探ってみた。上掲の1節と2節で述べたように、長年日本に滞在することによって、調査協力者の夢の大部分は実現できたように述べている。来日することによって、ある人の人生にどのような影響があるのかを調べるためには「来日を目指すためにする準備」「実際の日本での生活」「退職・帰国後の生活」、この3つの時期を丁寧に見る必要がある。例えば、日本でいい収入があっても退職あるいは帰国



後の生活に困難が生じるというケースも少なくない。だからこそ、長年日本に滞在しているバングラデシュ人が退職後あるいは帰国後の生活についてどのように考えているかを聞くことにした。

今までの収入や生活では満足している人が多かったが、これからの人生のことについての計画や想像はそれぞれであった。その中でも「R-10」のように、子供のことで心配する人が多かった。

子供の教育のことを考えて帰国したいです。日本にいたらちゃんと宗教（イスラム教）が守れない恐れがあるからです。子供が大人になったら、親が言うことを聞かないのです。心配です。

家族、特に子供の明るい将来のために来日し、家族や国を離れて長年苦勞してきた親が年を取ると、子供の将来のことを一番心配する傾向が見られた。子供に関する心配は主に2点あげられた。1つ目は子供が日本で大人になるとバングラデシュの習慣、文化、宗教が丁寧に守れなくなることである。2つ目は、帰国した場合、バングラデシュの学校や社会でついていけないことである。ほぼ同様な発言は「R-09」の語りにも見られる。

子供が大きくなったら日本の文化の影響でイスラム教徒のルールなどはほとんど守らないです。これを考えると長期的に日本滞在はできません。大きい子供を持っている知り合いの先輩たちもとても困っていると聞きました。みんな反省していますよ。子供が、特に女の子が小さければいいですが…。

子供の将来に関する心配の次に、これからの自分の仕事についての不安が上がってきた。協力者の中でこれからもずっと日本に残る人もいれば、そろそろ定年退職で帰国しないといけない人もいる。これからの仕事について「R-10」は次のように語っている。

自分のビジネスをやりたいですが、日本でやるか母国でやるか、迷っています。

「R-10」は38歳の男性で、比較的若い調査協力者であった。一般的に考えると彼はこれからも10年～20年以上日本に残って、自分のキャリアを構築できる人材である。上掲の発言から彼は日本に残るか、母国に帰るかを迷っていることがわかる。その理由は彼の前掲の発言から予想できる。子供の将来や宗教のことで心配しているからである。また、協力者「R-04」は次のように語っている。

日本で財布に100万円ぐらいあっても心配しませんが、バングラデシュで千円ぐらい持って歩くのも不安です。その安全性を考えても、国に戻りたくないです。

彼は将来のことを心配しているのだが、母国への信頼・信用が薄い。そのため、キャリアについてははっきり決められない状態にいる。日本は欧米と違って、言葉や文化がバングラデシュ人にとって遠く感じられる。日本ではバングラデシュ人の人数も少ないし、国籍なども簡単に得られないため、機会があれば日本からアメリカなどへ行ってしまおうバングラデシュ人も多い。最初から日本に永遠に残ることを覚悟して来日する人はほとんどいない。10年、20年日本で働いて、ある程度のお金を稼いで、それを自国で投資することを考える人が多い。だから、自国の職場環境あるいはビジネスの環境に満足しない人が多く、これからのキャリアで迷ってしまうのである。

これからの人生でもう一つ重要なことは墓についての心配である。60代の協力者2名は自ら死ぬこと、墓のこと、火葬か土葬などについて繰り返し話していた。60歳の男性「R-01」は次のように語っている。

イスラム教徒の我々は一番困っているのは死んだらどうなるか、どこのお墓に入れるか…先日〇〇県であるバングラデシュ人が亡くなったら、彼が火葬されました。イスラム教徒でこれはあり得ないことですが、奥さんが日本人でそうってしまったそうです。

墓はどうなるか、ということをお心配する理由は2つ考えられる。1つ目は上述のようにしっかりイスラム教徒のルールを守って土葬されるか、また、土葬される場合でもイスラム教徒の墓の場所が限られているため、それが着実に確保できるか、という心配である。2つ目は、母国で土葬した場合、家族が日本に残ると墓参りなどができず、親戚やバングラデシュ人コミュニティに悪い目で見られるということである。さらに、日本で死去した場合、遺体をバングラデシュまで送るのに100万円以上かかる。経済的に負担も大きく、ムスリムコミュニティに募金を願うこともある。

上記の結果を踏まえて、長年日本に滞在するバングラデシュ人にとって来日することは経済的にメリットがあり、自分の家族や親戚を幸せにしていることが分かる。ただし、年を取ると、子供の将来、宗教を守ることなどに関して不安になることが多い。

## VII. まとめと課題

幸せの定義は人によって異なる。今回の調査でも協力者がそれぞれの立場、元々の背景、学歴などを考慮した上で、回答していた。筆者自身も同国籍・宗教の人であり、背景にある社会・文化・宗教の要因を参考にしながら考察を行った。本稿では主に経済的に安定した生活を目指して来日しているバングラデシュ人が多いことを明らかにした。そして、乗り越えられない或いは直面した様々な問題があっても、来日時に抱いていた夢はある程度実現できたことも分かった。また、成功した人々は最初から日本語学習にも力を入れていた。Alam & Uddin (2022) が提唱したように海外での生活やコミュニケーションにその国・地域の言語能力は欠かせないものである。

2023年4月26日に東京で日本の岸田文雄総理はバングラデシュのシェイク・ハシナ首相と首脳会談を行った（日本外務省 2023）。両国のリーダーは『戦略的パートナーシップに関する日バングラデシュ共同声明』にサインした。この共同声明は「地域と世界の平和と安定のための協力」「相互利益及び地域繁栄のための経済協力の深化」「文化協力と人的交流の拡大」という3つの分野にフォーカスを当てている。バングラデシュ人が留学、仕事などで来日することや、日本で長期滞在することはこれからもますます増えていくだろう。

時間の制限などもあり、今回は女性協力者から多くの話を聞くことはできなかった。そして、短期滞在、中長期滞在と長期滞在の人々の考えや社会との関わり合いにも差が予想されたが、今後はそれらを丁寧に調査する必要がある。また、これから特定技能実習生などとしても来日するバングラデシュ人の数も増え、以前と比べて日本に長期滞在の人も増えることが予想されている。そのため人間関係に関する問題も予想される。本稿で焦点は当てなかったが、ほとんどの協力者が来日を目指している若いバングラデシュ人へのアドバイスとして「日本語能力」と「日本の文

化・マナーの基礎知識」を強調した。バングラデシュにおける日本語教育の最近の動向として、日本で直面する可能性があるコンフリクトのエピソードを「ケース学習」などの方法で学ぶことが勧められている（アラム 2023）。日本社会に長年にわたって円滑に生活するために適切な日本語教育や日本社会・文化に関する知識の必要性、そしてそれを来日前にバングラデシュの教育現場でどう取り入れるかについて更なる研究を行うことが今後の課題となる。

## 謝辞

本研究は成蹊大学アジア太平洋研究センターの招聘研究員として、2022年7月29日より2022年8月31日までの1ヶ月、日本で調査研究させていただいた成果の一部です。成蹊大学アジア太平洋研究センターに招聘され、また同大学の小林盾教授にご指導を、大学院生の森田厚氏にご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

## 利益相反について

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

## 参考文献

- アラム・モハメッド・アンサルル 2005年「会話力を高めるための授業の提案—バングラデシュの日本語学習者を対象に—」『日本言語文化論集』創刊号、国際交流基金日本語国際センター・国立国語研究所・政策研究大学院大学、創刊号、149-176.
- 2015a年「使用頻度から見た在日バングラデシュ人の日本語使用の実態—留学生と社会人に対する質問紙調査から—」『言語政策』第11号、7-20.
- 2015b年「在日バングラデシュ人の日本語使用実態と社会的関係の構築—バングラデシュの日本語教育の改善を目指した政策への提言—」『政策研究大学院大学・国際交流基金日本語国際センター博士論文』.
- 2016年「インタビュー調査から見た在日バングラデシュ人の人間関係構築—日本語学校の学生のアルバイトにまつわるエピソードに注目して—」『日本言語文化研究会論集』第12号、国際交流基金日本語国際センター・政策研究大学院大学、35-53.
- 2019年「バングラデシュ人日本語学習者のためのケース教材作成の試み」『国際交流基金日本語国際センター・政策研究大学院大学』第15号、29-48.
- 2023年『バングラデシュ人日本語学習者のための「ケース教材」』ダッカ：令和.
- 茂戸藤恵 2012年「外国人が職場で感じるギャップや抵抗—アジア5カ国を対象としたグループインタビューから—」『Works review』第7号、150-153.
- 松本久美子 2000年「バングラデシュにおける日本語教育・日本留学事情」『長崎大学留学生センター紀要』第8号、101-114.
- 国際交流基金「2021年度 日本語教育機関調査」  
 <<https://www.jpfi.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey21.html>> 2023年9月15日

参照.

日本外務省「バングラデシュ人民共和国」

<<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100496993.pdf>> 2023年9月10日参照

バングラデシュ教育省「National Education Policy 2010」

<[https://moedu.gov.bd/site/page/318a22d2-b400-48a7-8222-303ab11cc205/-](https://moedu.gov.bd/site/page/318a22d2-b400-48a7-8222-303ab11cc205/)> 2023年9月12日参照.

Alam, M. A. 2020. Japanese Language Education in Bangladesh -Recent Developments and Challenges-. In A. Shyam (Ed.) *Japanese Language Education in South Asia -Issues & Challenges-* (pp 14-38). Hyderabad: The EFL University Press.

Alam, M. A. 2022. “Professional Development of the Japanese Language Teachers in Bangladesh: Present Situation and Challenges”. *Journal of the Institute of Modern Languages*. University of Dhaka. Vol 32: 13-36.

Alam, M. A. & Uddin, M. 2022. The Contribution of Japanese Language Education to the National Development of Bangladesh. In Rahman, S. & Alam, M.A. (Ed.) *Foreign Language Education for National Development -Contribution of the Institute of Modern Languages (IML)-* (pp 165-207). Dhaka: Institute of Modern Languages.